

【研究主題】 どの子にも学びのある授業づくりを目指して

【副題】 ～坂本小スタンダードを基盤とした授業づくり、学びに向かう集団づくり～

【学校・団体名】 滋賀県大津市立坂本小学校

【役職名・氏名】 校長 上島 憲一

1 坂本小スタンダード作成の経緯

坂本小学区は、古くからの文化財、旧跡も多く石積みの町としても有名である。四季それぞれに趣があり訪れる観光客も多い。また、地域とのつながりが強く、コロナ以前は地域の方々とふれあう学校行事や委員会活動が盛んに行われていた。

家庭的には生活基盤の弱い家庭が多く、学力的にも支援を要する子どもが多い。したがって学習面においては、基礎的・基本的な内容の定着に重きを置き、低位の子どもたちに手厚い指導を行ってきた。どちらかという生徒指導中心の、力量ある教員の指導力に頼りがちな学級経営であり、担任が変わることで学習スタイルや学習ルールが変わることが課題として挙げられていた。

そこで、今後児童数増加が見込まれる坂本小学校で、本校の強み・弱みをどのように克服するかを議論した結果、全学年で授業の系統性や本校に必要な学び方を改めて見つめなおすこととなり、授業の流れ、ノートや板書指導など、学習の基本的な内容を校内で統一し、学年や担任が変わっても子どもたちが同じスタイルで学習に取り組むことができるようにするために、「坂本小スタンダード」を作成することとなった。令和3年度に「自分の考えをもち、学びを深める子どもを育てる」～協働的な学びを通して、学ぶ楽しさを実感することができる算数科指導～という研究主題、副題のもと、坂本小スタンダードを基盤にして取り組んだ校内研究の具体的内容と成果、今後の課題について述べる。

2 実践内容および成果と課題

1) 学級会を大切にしたい学級経営

坂本小学校では協働的な課題解決のあり方を学ぶ学級活動を大切にしている。学級会を通して、互いに認め合える学級づくりを進めている。特に1学期は学びの基盤となる基礎的な資質能力を育てる期間とし、学級経営に力を注いでいる。学級会について

は、苦手意識をもっていたり、進行の方法に不安を感じていたりする教師も少なくなかった。

そこで、1学期には特活主任を中心に公開授業を行ったり、研修を重ねてきたりした。1学期という忙しい時期ではあるが、この時期に実践的な知識や技術を知ることによって学級会に苦手意識のある教師でも「今年度は学級会を柱に学級づくりを進めてみよう」という前向きな思いをもつことへとつながった。そして、研修以外の場でも進行方法や司会グループへの助言内容などを日常的に相談、話し合うという教師の学級活動へ取り組む姿勢に変化が見られた。

また、学級会に使用する教具や進行の方法を統一することで、どの教師も自信をもって学級会を行えるようになった。教師の意識調査における学級会達成率では1学期が66%だったのに対し、年度末には94%まで数値が向上した。また、学級活動の要領や取組を学級経営に生かすことができるようになり、日常生活場面でも子どもたちが協働的に課題を解決する場面が見られることもあった。

さらには、形骸化しつつあった委員会活動に子どもたちの新しいアイデアや意見が反映されるようになり、よりよい坂本小学校を築きあげていこうとする高学年が育ちつつある。だが、時間的な難しさや教師のさらなるスキルアップの必要はある。今年度も継続して学級会を積極的に行い、一人一人の力量を高めている。



写真①生活委員会あいさつ運動の様子

各クラスをまわりあいさつのお手本をみせるなど工夫を凝らした活動を行っている。

2) 読み優先の漢字教育の推進

読み先行の漢字学習

- ① 1日1漢字
漢字の成り立ちや漢字の意味、使い方を学ぶ
- ② 音読名人
例文を通して、漢字の意味を捉える
- ③ 書き名人
日常的に漢字を生かせるようにする

資料① 読み優先の漢字教育の教材

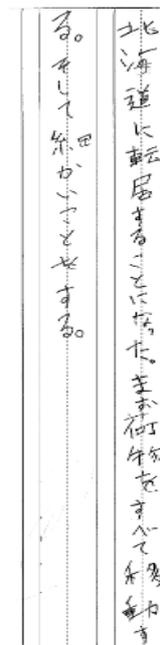


本校では昨年度から「読める」ようになってから「書く」練習に入っていくという読み先行の漢字学習に全校で取り組んでいる。これまでは市販のドリルを活用して、読み書き同時進行で学習し、漢字を反復して書く、という指導を行ってきた。だが、この学習の展開では子どもの学習負担が大きく、文章中で漢字を使うことがなかなかできないという現状があった。そこで、「読める」ようになってから「書く」練習に入っていきという全校統一した展開で漢字学習に取り組んでいる。

まず、①動画を使って漢字の成り立ちや意味を理解する。その上で、②音読名人にある例文に触れる

ことで、文章中でどのように使われる漢字なのかを考えながら習得していく。友だち同士でお互いに読めるようになった漢字を日々聞き合う活動も取り入れることで、良好な人間関係を育むきっかけとなっている。さらに、③書き名人では文章中で新出漢字を覚えていくことにより、日常的に漢字を生かせるようにしている。

資料②



資料②は、書き名人にある新出漢字を使ったチャレンジ欄である。これは、漢字学習に苦手意識をもつ子どもの文章であるが、低学力の児童でもこのように2～3文の文章が既習漢字を用いて書くことができるようになってきている。このチャレンジ欄について、家庭学習の場で一生懸命考えている姿を見られるようになったと保護者から感想をいただいたクラスもあった。どんな文章が考えられるか、親子の会話がはずむようなこともあったという。また、「読める」という自信が、子どもたちの読書量の増加へもつながってきている。

その一方で、これまでと異なる漢字指導のため、不安を感じる保護者の声もあった。コロナ禍ということもあり、実際の学習の様子を参観してもらうということも難しく、保護者への周知という点では課題となった。

3) 坂本小スタンダードを基盤にした授業づくりの具体的内容

①授業の流れ、板書・ノート指導の統一

はじめに述べたような経緯により、昨年度から坂本小スタンダードを基盤にした授業づくり、授業改善に取り組んでいる。授業の流れ、板書・ノート指導の流れを統一し、「めあて」「自分で考えよう」「まとめ」「ふりかえり」等の黒板に貼り付けて使用する全クラス共通のカードを作成し、どのクラス、どの教科でも活用するようにしている。このカードの活用により、進級した後もどのクラスでも同じ流れで学びの展開が引き継がれ、どの教科でも「めあて」

や「自分で考えよう」、「まとめ」、「ふりかえり」を教師が意識して取り組むようになった。何よりも、教師も子どもも学習の展開に見通しをもって取り組めるようになったことが一番の成果である。

②「考えて書く」力の育成

ノート指導では、先に述べた形式で指導すると同時に、式や答えだけでなく、自分の考えを文章や図など自分の言葉で表現できる、「考えて書く」力の育成に取り組んだ。月に1回行われる部会では、各学年のノートを持ち寄り、どのような指導が効果的だったか、現段階でどのくらい子どもたちの表現する力が育ってきているのかを意見交流し合った。自クラス、自学年だけではなく、その前後の学年、そして高学年の書きぶりを知ることで、どのような表現力を育てるのか見通しをもってノート指導にあたることができた。

ノート指導についての同じ取組内容での継続的な指導により、少しずつ子どもたちの中で「書く」ということが習慣化され、書くことへの抵抗が軽減されていった。毎時間ごとに教師が一人ひとりの子どもの書きぶりを確認し、どこが良かったのかを簡潔・適切に評価する。このことの積み重ねがあったからこそその成果である。

また、ノートに表現された考えを活用してペア・グループ学習を積極的に行った。子どもたちにとってノートが板書されたことを書き写すツールから、自分の考えを表現するツールへと変化していった。式、答えだけでなく図や表、矢印を活用して思考を表現する姿から子どもたちが他者を意識してノートを書くようになってきていることがわかる。

上学年では手本になるようなノートを定期的に教室に掲示した。普段から手本が身近にあることで、

より具体的にどのようにノートを整理したり、自分の考えを表現したらいいのかをイメージしたりできる手だての一つとなった。写真②は、5年生で掲示されていたものである。この学級ではどこが素晴らしいかノートに記入した上で、子どもたちが



写真②掲示されたノートの手本

毎日使う教室の扉に掲示していた。このような、ちょっとした工夫を行うことでさらに効果的に手立てとなった。

4) その他の取組

坂本小スタンダードという共通の基盤があることで、日々の授業づくりが校内研究へとつながっていた。さらに校内研究が一人ひとりの教員の取組となるよう、これまでに挙げた手立てやそれぞれの教員が他校での公開授業や研修で学んだこと、教師・児童アンケートの集計結果、管理職からいただいた意見など、様々な情報を研究通信としてまとめ定期的に発信するようにした。

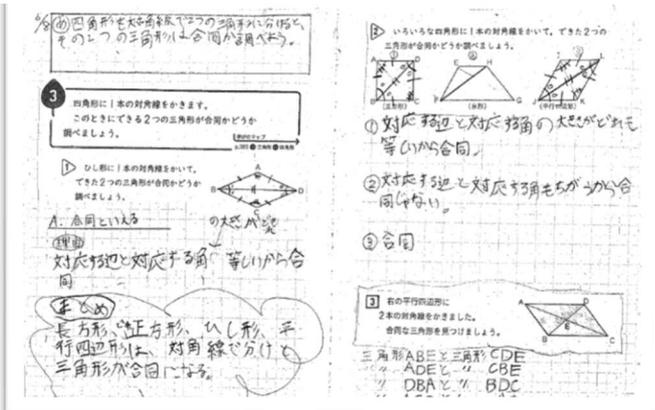
特に公開授業でいただいた指導案や指導助言は、2学期以降の授業者は授業を組み立てるヒントとなった。また、日ごろのちょっとした取組や手だて、例えば情報教育に堪能な教師が授業でどのようにICTを活用しているかなどを紹介することもあった。他学年の教員が「これってどうするの?」と互いの手立てや取組について尋ね合うなど、研究通信が教員同士の情報交換のきっかけとなる場面も見られた。

3 全体を通しての成果と課題

資料④教師への意識調査

質問項目	R3.6	R4.1
考えて書く力を高めるノート指導	61%	100%
板書の可視化、操作化、構造化	66%	100%
坂本小スタンダードの授業展開の定着	66%	81%
協働的課題解決の基盤を育む発達に応じた系統的な学級会達成率	66%	94%
自分の考えをもち、学びを深める姿がある授業	72%	100%
協働的な学びを通して学ぶ楽しさを実感する姿がある授業	88%	100%

資料③ 5年児童のノート



本校では、校内研究の成果指標を確認する手立てとして教師への意識調査を位置づけている。

資料④は、教師への意識調査の結果をまとめたものである。個々の教師にとって主体的な校内研究となるよう、普段から質問項目にあるようなことを意識して授業づくりを行っているか振り返ることで、教師の意識づけにつながることがねらいである。1学期は異動もあり、坂本小スタンダードや校内研究の方向性など教師によって温度差が見られた。だが、ここまで述べてきたような取組について共通理解を図りながら取り組んだ結果、教師の意識は大きく変容した。個々の教師でそれぞれの思いやスキル、目標は違うが、教師が同じ方向を向いて授業改善に取り組んでいることがわかる。また、現れた数値は日々の教師の姿にも大きく反映している。実際本校の職員室では毎日のように子どものノートや実際の子どもの発言や困り感をことに授業づくり、学級・学年経営をどうしていくか熱心に話し合う姿が毎日のように見られる。「よりよいものを築きあげていこう」という教師の思いが授業づくりの土台となっている。

もう一つ校内研究の成果指標に位置付けているのが子どもへのアンケートである。令和3年6月実施のアンケートでは、本校の算数の学習が好きだと回答した子どもは約7割いた。その理由として「答えが明確で分かるとすっきりする」という知識・技能的な面での楽しさを感じている子どもが大半だった。

だが、昨年度1年間の校内研究を経て、子どもたちの「算数が好き」という内容は少し変化した。(資料⑥) これまで同様、問題やテストで答えが分かったときに楽しさを感じる子どもに加え、友だちの考えをきいたり、友だちと考えを交流したりすることに学ぶ楽しさを感じることができている子どもが半数近くになった。これは坂本小スタンダードを基盤とした校内研究の大きな成果の一つであるといえる。

だが、自分の考えを伝えるということには楽しさを感じることも難しいことも分かる。グループ活動の中で自分の考えを伝えたという思いはあっても、自信のなさから受け身になってしまう子どももまだまだ多い。また、学力の高い子どもが中心となつて一方的に考え方を教え込むような場面も見られる。グループ活動だけでなく、学力の高い子どもが授業を進めがちになり、低位の子どもたちへの手立てが追い付かず全員が学びを深めることができなかった

り、学ぶ意欲が低い子どもを学習の土台に乗せられなかったりと成果ばかりではない。学力が高い子どもも低い子どももそれぞれ学ぶ目的をもつこと、そして子どもたち一人一人が得た学びをどのように表出させ、どのように教師はそれを見とり、評価していくのか今後の校内研究の大きな課題である。

資料⑥児童アンケートとそのまとめ

あてはま

るものに○をつけてください。

(1) あなたは算数の学習が好きですか。
①とてもそう思う ②少し思う ③あまり思わない ④全く思わない

(2) あなたは算数の学習で自分の考えをもつことができていると思いますか。
①とてもそう思う ②少し思う ③あまり思わない ④全く思わない

(3) あなたは算数の学習で、理由をつけて考えを伝えることができていると思いますか。
①とてもそう思う ②少し思う ③あまり思わない ④全く思わない

(4) あなたは算数の学習で友だちの考えを聞いて、自分の考えのちがいに気づいたり、自分の考えを深めたりすることができていると思いますか。
①とてもそう思う ②少し思う ③あまり思わない ④全く思わない



算数科の学習でおもしろいと感じるときはどんなときですか。あてはまる数字にすべて○をつけましょう。

- | | |
|------------------|--------------|
| ① 新しい問題をとくとき | ⑥ ふりかえりを書くとき |
| ② 先生の説明を聞くとき | ⑦ 答えが分かったとき |
| ③ 自分の考えを話すとき | ⑧ その他() |
| ④ 友だちの考えを聞くとき | |
| ⑤ 友だちとの考えを交流するとき | |

質問項目	R3.6	R4.1
初めて問題に出会ったとき	40%	51%
先生の説明をきくとき	28%	28%
自分の考えをいうとき	25%	24%
友だちの考えをきくとき	33%	42%
友だちと考えを交流するとき	29%	45%
ふりかえりを書くとき	19%	20%
テストの答えが分かったとき	61%	67%

4 おわり～今年度取り組んでいくこと～

今年度は、昨年度から培ってきた子どもたちの学びの意欲を基盤に、学力の底上げをねらいとした授業改善を通して、さらなる学力向上を目指していきたい。また、今年度も学級活動を基盤とした学級経営を行うことで、どの子どもも自分の考えや思いをより一層安心して話すことができる学級の風土を築き、その上で、子ども一人ひとりが「できた」「分かった」「もっとやりたい」という思いがもてる授業づくりを推進していきたい。

コロナ禍だから「できない」ではなく「なんとかできる方法」を前向きに探っていきながら、全職員が同じ思いで校内研究を進めていきたいと考える。

(執筆責任者 教諭 森下 菜穂)